

第5回三木市学校再編検討会議 要旨

日 時： 平成31年1月18日(金) 午後7時～9時

場 所： 市役所5階 大会議室

出席者：

構 成 員 加治佐哲也 国立高等専門学校機構 監事

山下 晃一 神戸大学大学院 准教授

小山内政子 三木市区長協議会連合会 会長

神澤 廣美 三木市区長協議会連合会 副会長

安福 政明 三木市連合PTA 前会長

黒井 俊光 三木市連合PTA 前副会長

前田 信利 平田小学校 校長 (小学校校長会)

野口 博史 緑が丘中学校 校長 (中学校校長会)

事 務 局 西本則彦教育長、奥村浩哉教育振興部長、

生田淳仁学校教育課長、鍋島健一学校教育課副課長

傍聴人の数： 16名

1 開会、会長あいさつ

(会長)

学校再編については、総合教育会議において最終的に様々なことを決定していくわけだが、学校再編検討会議では、集中的、専門的に今後の三木市の学校のあり方について協議を重ね、方向性を含んだ計画、つまりは学校再編の方針を総合教育会議に対して提案していくこととなる。

本日は前半で、三木市が今後の学校再編を通じて設置を検討している小中一貫校や義務教育学校というものについて協議していきたい。

我々は改めて小中一貫教育の意義や推進するに当たって注意すべき点などについて確認し、総合教育会議に提言できるようにしていきたい。

すでに教育委員会事務局が地域部会等で、地域の声をお聴きしているが、本日の後半では、喫緊の課題としている3中学校区(志染・星陽・吉川)から代表の方にお越しいただき、直接ご意見を頂戴し、方針等をまとめる際の参考にしたいと考えている。

ただし、意見聴取者から、意見を述べやすいように非公開でお願いしたいとの要望が出されている。したがって、意見聴取については、非公開とし、率直なご意見を聞くようにしたいと思っている。委員の皆さんのご意見を伺いたい。(異議なし)

2 報告事項

(事務局) 資料を基に説明

(1) 総合教育会議(平成30年11月29日、12月25日実施)の経過説明

前回の学校再編検討会議から出された提言意見の多くは賛同を得た。加えて、以下の事柄が確認された。

- ・統合校決定後に準備期間を必要とすることから、平成 32 年度からの統合にはこだわらないという方向性の確認
- ・個人による学校選択制は進めない方向性の確認

(2) 子どもに求められる学びについて

①子どもが生きる未来と必要とされる力、②学校教育を通して今付けるべき力、③求められる学びについて確認する。

(3) 小中一貫教育について

小中一貫教育（小 1 から中 3 までの 9 年間を貫いた教育）は、全国で 10 年以上の実績があり、小中一貫教育が求められ理由や背景について確認する。

(4) 三木市の学校再編のイメージ

三木市の地図を用い、5 校区に再編する際の学校設置位置の目安等を示す。

3 協議事項

(会長)

地域から学校が無くなるというのは大きな問題なので、危機感は理解する。分校を設置するなどして、地域に学校を残したい気持ちはよく分かる。しかし、将来子ども達に必要となる力や小中一貫教育の推進ということを考えると、より小さな学校となる分校にするのは、子どもの教育という観点からは望ましくない。教員の配置や集団として、どういう活動を通じて子どもを教育していくのかを考えると、分校というのは慎重に考えた方がいい。

子どもたちが学びを深めるためには、やはり一定規模と多様性に触れることが必要である。交流ということでは、同学年の人数がある程度いた方がいいし、小中一貫教育を取り入れることで、異学年との交流の幅が広がり、様々な発段階の子どもたち同士が触れ合える。地域も参加すれば、地域での活動も更に広がる。中 1 ギャップということからも、あきらかに不登校は減ることが期待できる。

(委員)

会長が言われたように、ある程度の人数規模での交流は必要だと思う。私が校長を務める学校の子どもの数は増える傾向にあるが、バランス的には、まだ人数の少ない学年と多い学年がある。多い学年が、三木市が提案している規模と同等である。子どもたちの交流の様子や多様性の中から出てくるアイデア等を見ていると、子どもたちの育ちを感じることができる。

私は中学校の教員の経験があり、その当時は小学校のことがよく分からない中で、中学校の子どもたちと接していた。逆に、かつての小学校では、中

学校のことがよく見えていなかった。そこで、今では小中一貫教育まではいかないが、様々な分野で小学校と中学校が連携しながら教育を行う取組が進められてきている。連携することで、小中学校間の接続がスムーズに進められるようになってきた。普段から絶えず小中学校が接している小中一貫校では、さらにお互いがよく見えてくるだろう。

分離型の小中一貫校は小学校と中学校はまだ独自性を持ってはいるが、一体型の小中一貫校では、お互いのことがさらに見える部分があるので、小学校のつまずきを中学校の教師が理解した上で指導を行うなど、学力向上の観点からもプラスになることが多いと感じる。教員にとっても大きなプラスとなる。

今、兵庫県内で行われているトライやる・ウィークで中学生が小学校にやってくるが、中学校2年生の子どもたちが小学1、2年生を一生懸命に指導したり、フォローしたりする姿を見ていると、むかし、地域で子ども達と一緒に遊んでいる姿や地域の中で縦の繋がりを大切にしながら子どもが育っている姿のように感じた。説明にあったような小中一貫教育の効果は十分あると感じている。

(副会長)

今回小中一貫教育や小中連携、義務教育学校について議論が進んでいるのは非常に望ましいことだと思う。

和歌山では15年ぐらい前から小中一貫・小中連携の話はしていた。三木市でも、もっと早くに議論していても良かったのではないかと思っている。それだけに一定のスピード感を持ってやっていく必要がある。

地域の存続、地域の発展と学校の発展というのは、デリケートで難しい関係がある。時間が経てば経つほど、少ない中での経験しかない子ども達がどんどん増えていく。言い方を変えれば、子どもたちを犠牲にしているということになるかもしれないので、大人がしっかり責任を持って、議論をしないといけない。子どもが地域の犠牲になることはあってはいけないと思う。

小中一貫教育について考えた時に、例えば、中学校に入る時に段差があつてすごいストレスを感じることがある。もちろんストレスは全部が悪いわけではないので、適度なストレスにしてあげることが必要だろう。それがちょっと激しすぎることがある。「そんなこと甘いよ」というご意見はあるかと思うが、子どもたちが変わってきているので、それに合わせて考えてあげるとはとても大事だと思う。

かつて和歌山で小学校と中学校間で議論していたのは、例えば小学校の先生は「小学校の時は、あんない子やったのに中学校に入ってあのようになってしまった」とちょっとがっかりされる。次に中学校の先生は「なんでこれぐらいのこと、小学校でちゃんと教えないんや」とおっしゃる。すごく不幸な行き違いがある。お互いに同じ場面を共有したりすると、「そういう理由

だったのか」と理解できることがある。

例えば、中学校は教科の専門性が高い、小学校はすごく丁寧な授業をするということで、教員間でもいい刺激になる。学校の規模が小さいということは教師集団も小さくなるので、お互いに学ぶ機会がどんどん減ってしまう可能性がある。そういうことも視野に置きながら、子どもたちにとって何がベストなのかを考える。小中一貫校でのメリットは、子どもたちにとって学び直しができる機会が増えてくる。

(委員)

どんな子どもに育てたいのかをしっかりとっておくことが大切だと、常々私は考えている。先日、子どもたちに、「平成の時代はデジタル化の時代だった。次の時代は、温もりの時代である。」という話をした。どんな子どもになってほしいかと考えた時に、やはり、あたたかい温もりのある子になってほしいと思う。そういった時に、小中一貫教育というのは、適しているのではないかと思う。異年齢集団の活動を通じて、相手の気持ちを考えるようになったとか、自己肯定感が高まったという調査結果がある。これからの子どもには、温もりを持ってもらいたい。変化に対応することも大切だが、不易な部分、これまでも教育上、皆が大切にしてきた部分も改めて子どもたちに教えることが大切と考える。

(会長)

子どもたちを育てるツールとして小中一貫教育が有効であるというお話をいただいた。

資料3「三木市の学校再編のイメージ：5つの小中一貫校を設置する目安」についてはどうか。

(委員)

第1校区の4つの小学校（吉川4小学校）は、小規模化が進んでおり、喫緊の課題として、他の小学校に比べてスピード感をもって考えていかないといけない。吉川中校区の小学校が一つになるので、2～5校区に比べて、小中一貫校への移行は進めやすいのではないか。ただし、AからCで示された星陽中学校の再編に係る課題については、しっかりと意見交換をしなければならないと考える。

第1校区の小中一貫校の設置を早くスタートすることによって、小中一貫の良さを三木市としてもアピールできると思う。また、ひとつのモデルとしても良さが示され、他の校区における小中一貫校への移行もスムーズに行えるようになる。

(会長)

第1校区の方はおそらく成功して進むと思う。学校をどう組み合わせるかは、地域の方の意見をよく聴いて進める必要がある。

三木市の大きな特徴というのは、施設一体型の小中一貫校を新設するとい

うこと。他でも再編は行われているが、財政的なこともあり、最初から新設されるという所はあまり多くは無い。跡地が処理できたら新設するというような考えは他にもある。新しい学校で教育が進められることに明るい希望が持てる。

(委員)

大きな流れについては、なるほどと思う。しかし、これまでの小さい学校のメリットが逆にデメリットになるということが言われている。そういう小規模の環境の中で教育を受けてきた者には、急に変わったようなイメージがある。地域において、学校中心だった所が学校中心でなくなることに、認識のずれは出てくると思う。例えば、付けるべき力、求められる学力、どんな将来になるかなどは、小さい学校でも大きい学校でも同じだと思う。これからの学びには適正規模が必要なのでそうなるという理屈はよく分かるが、まだ心の中がぎくしゃくして、転換ができないところがある。

(会長)

これからの取組は確かに未経験のことなので、そう思うことも分かる。

全国的にはこうした小中一貫校や義務教育学校は確実に増えている。どこの地域でも子どもの数は減少していくので、将来的には小中一貫校や義務教育学校が主流になるのではと思う。

(副会長)

逆に考えると、大きい学校で育ってきた人を否定することにも聞こえることがある。これまでの自分達の生き様とこれからの未来を生きていく子どもたちの生き様とは、切り離して考えていかなければならない。小さい学校にも大きい学校にも良い所はある。ただ、大きい規模の学校の中で、小さいグループを作って学んでいくことはできるが、逆は難しい。

教員の集団についても、ある程度の大きさが必要と考える。人は自分の過去の経験に基づいて話をするが、一番大事なものはその個別に持っている様々な経験をつなぎ合わせていくことだと思う。例えば大きい所で育った人は大きい所の事しか分からない。逆に、小さい所で育った人は、小さい所のことしか分からない。その上で、それらを繋ぎ合わせて、子ども達にきちんと話をしていく事が必要だと考える。

学校再編の問題については、地域での大人の学びが大事だと思う。学んだ結果、やはり小さいほうが良いという事もある。その上で、大人が学ぶようになると、子どもも学ぶと思う。大人が変われば、子どもも変わる。小さい所で育ってきた大人を否定する議論では決してないということをご理解いただきたい。この学校再編には、子どもの事を一番に考える地域の大人の学びが大切だと思う。意見をぶつけていくのはいいが、ぶつけた先に大人の学びが確実にないとだめだと考える。

以下 意見聴取（非公開）